

## 道徳科を中心とした提言（毛内 嘉威 先生）

質の高い道徳科の授業の構築には、明確な指導観をもって、授業の中で予想される具体的な児童生徒の学習状況を想定し、学習指導過程や指導方法を工夫しながら道徳性の育成を第一に考えて授業を構想することが重要である。

授業のねらいは、よりよく生きるための基盤となる道徳性を育てることであり、そのためには児童生徒の実態把握等に基づく指導計画（全体計画、別葉、年間指導計画）が必要不可欠である。

道徳科の授業においては、児童生徒に主体的に考えさせることを明確にして、1 単位時間の中に、①道徳的価値について理解する学習、②自己を見つめる学習、③物事を多面的・多角的に考える学習、④人間として（自己）の生き方について考える学習、の4つの学習が含まれていなければならない。

### 1 道徳科の指導の方針

道徳科においては、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、年間指導計画に基づき、児童生徒や学級の実態に即し、道徳科の特質に基づく適切な指導を展開しなければならない。

#### (1) 道徳科の特質を理解する

道徳科は、児童生徒一人一人が、ねらいに含まれる道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間として（自己）の生き方についての考えを深める学習を通して、内面的資質としての道徳性を主体的に養っていく時間であることを理解する。

#### (2) 信頼関係や温かい人間関係を基盤に置く

道徳科の指導は、よりよい生き方について児童生徒が互いに語り合うなど学級での温かな心の交流があつて効果を発揮する。教師と児童生徒との信頼関係や児童生徒相互の温かい人間関係は、児童生徒一人一人が自分の感じ方や考え方を伸び伸びと表現することができる雰囲気を日常の学級経営の中で創り出すことによって豊かに育まれていく。

また、道徳科における教師と児童生徒及び児童生徒同士の心の交流は、学級の人間関係をより一層確かなものにしていく。道徳科が学級経営と深く関わっていることを理解し、学級における信頼関係に基づく温かい人間関係を築き上げ、心の交流を深めることが大切である。

#### (3) 児童生徒の内面的な自覚を促す指導方法を工夫する

道徳科の指導の目指すものは、個々の道徳的行為や日常生活の問題処理に終わるものではなく、生徒自らが時と場に応じて望ましい道徳的な行動が取れるような内面的資質を高めることにある。つまり、道徳科は、道徳的価値についての単なる知的理解に終始したり、行為の仕方そのものを指導したりする時間ではなく、ねらいとする道徳的価値について児

児童生徒自身がどのように捉え、どのような葛藤があるのか、また価値を実現することにどのような意味を見いだすことができるのかなど、道徳的価値を自己との関わりにおいて捉える時間である。したがって、児童生徒が道徳的価値を内面的に自覚できるよう指導方法の工夫に努めなければならない。

#### (4) 児童生徒の発達や個に応じた指導方法を工夫する

児童生徒の発達は年齢によってほぼ共通した特徴を示すこと、年齢相応の発達の課題があることなどを十分把握して指導に当たる必要がある。しかし同時に、児童生徒の発達には個人差が著しいことや、日々の生活において個々の児童生徒が様々な課題を抱えていることを踏まえて、児童生徒一人一人や学級、学年の傾向をよく把握し、適切な指導を工夫する必要がある。生徒一人一人が、道徳科の主題を自分の問題として受け止めることができるように指導を工夫し、興味や関心を高められるように配慮することが大切である。

#### (5) 問題解決的な学習、体験的な活動など多様な指導方法の工夫をする

実際の生活においては、複数の道徳的諸価値が対立し、葛藤が生じる場面が数多く存在する。その際、一つの答えのみが存在するのではなく、児童生徒は時と場合、場所などに応じて、複数の道徳的諸価値の中からどの価値を優先するかの判断を迫られることになる。こうした問題や課題について、多面的・多角的に考察し、主体的に判断し、よりよく生きていくための資質・能力を養うことが大切である。このためには、問題解決的な学習が重要である。豊かな体験は、児童生徒の内面に根ざした道徳性を養うことに資するものである。これらの体験活動を通して児童生徒が気付く様々な道徳的価値は、それらがもつ意味や大切さなどについて深く考える道徳科の指導を通して、内面的資質・能力である道徳性としてより確かに定着する。道徳科の指導においては、職場体験活動やボランティア活動、自然体験活動などの体験活動を生かし、体験を通して感じたことや考えたことをもとに対話を深めるなど、心に響く多様な指導の工夫に努めることが大切である。

#### (6) 道徳教育推進教師を中心とした指導体制を充実する

道徳科の指導を計画的に推進し、また、それぞれの授業を魅力的なものとして効果を上げるためには、校長の方針の下に学校の全教師が協力しながら取組を進めていくことが大切である。校長の方針を明確にし、道徳教育推進教師を中心に指導体制の充実を図るとともに、道徳科の授業への校長や教頭などの参加、他の教師との協力的指導、保護者や地域の人々の参加や協力などが得られるように工夫する。

また、道徳科の指導を展開するに当たっては、全教師が学校の道徳科の基本方針を十分に踏まえ、どのような児童生徒を育てようとするのか、そのために道徳科はどのような役割を果たすのか、また、どのような指導をしようとするのかということについて、共通に理解していくことが必要である。

また、教師は自らの個性を十分に生かして指導に当たることが望ましい。なぜなら、教師の人間味ある指導の下でこそ、児童生徒が充実感をもって語り合い、考え、議論するような指導が展開できるからである。その際、教師は児童生徒と共に考え、悩み、感動を共有して

いくという姿勢で授業に臨み、児童生徒が自ら課題に取り組み、考え、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことができるように配慮することが必要である。

## 2 道徳科の特質を生かした学習指導の展開

### (1) 道徳科の学習指導案

#### ア 道徳科の学習指導案の内容

道徳科の学習指導案は、教師が年間指導計画に位置付けられた主題を指導するに当たって、児童生徒や学級の実態に即して、教師自身の創意工夫を生かして作成する具体的な指導計画案のことである。これはねらいを達成するために、児童生徒がどのように学んでいくのかを十分に考慮して、何を、どのような順序で、どのような方法で指導し、評価し、さらに、主題に関連する本時以外の指導にどのように生かすのかなど、学習指導の構想を一定の形式に表現したものである。学習指導案は、教師の指導の意図や構想が適切に表現されることが好ましく、各教師の創意工夫が期待される。したがって、その形式に特に決まった基準はないが、一般的な内容としては次のようなものが考えられる。

#### (ア) 主題名

原則として年間指導計画における主題名を記述する。

#### (イ) ねらいと教材

年間指導計画を踏まえてねらいを記述するとともに教材名を記述する。

#### (ウ) 主題設定の理由

年間指導計画における主題構成の背景などを再確認するとともに、①ねらいや指導内容についての教師の捉え方、②それに関連する生徒のこれまでの学習状況や実態と教師の児童生徒観、③使用する教材の特質や取り上げた意図及び生徒の実態と関わらせた教材を生かす具体的な活用方法などを記述する。記述に当たっては、生徒の肯定的な面やそれを更に伸ばしていこうとする観点からの積極的な捉え方を心掛けるようにする。また、抽象的な捉え方をするのではなく、児童生徒の学習場面を予想したり、発達の段階や指導の流れを踏まえたりしながら、より具体的で積極的な教材の生かし方を記述するようにする。

#### (エ) 学習指導過程

ねらいに含まれる道徳的価値について、児童生徒が道徳的価値についての理解を基に道徳的価値や人間としての生き方についての自覚を深めることを目指し、教材(資料)や児童生徒の実態などに応じて、教師がどのような指導を展開していくか、その手順を示すものである。一般的には学習指導過程を、導入、展開、終末の各段階に区分し、生徒の学習活動、主な発問と児童生徒の予想される反応、指導上の留意点などで構成されることが多い。

#### (オ) その他

例えば、他の教育活動などとの関連、評価の観点、教材分析、板書計画、校長や教頭

などの参加、他の教師との協力的な指導、保護者や地域の人々の参加や協力など、授業が円滑に進められるよう必要な事柄を記述する。なお、重点的に取り上げる内容や複数時間にわたって関連をもたせて指導する場合は、全体的な指導の構想と本時の位置付けについて記述することが望まれる。

イ 学習指導案作成の主な手順は、おおむね次のようなことが考えられる。

(ア) ねらいを検討する

指導の内容や教師の指導の意図を明らかにする。

(イ) 指導の重点を明確にする

ねらいに関する児童生徒の実態と、各教科等での指導との関連を検討して、指導の重点を明確にする。

(ウ) 教材を吟味する

教科用図書や副教材の題材について、授業者が生徒に考えさせたい道徳的価値に関わる事項がどのように含まれているかを検討する。

(エ) 学習指導過程を構想する

ねらい、児童生徒の実態、教材の内容などを基に、授業の展開について考える。その際、児童生徒がどのように感じたり考えたりするのかのような問題意識をもって学習に臨み、ねらいとする道徳的価値を理解し、自己を見つめ、多様な感じ方や考え方によって学び合うことができるのかを具体的に予想しながら、児童生徒が道徳的価値との関わりや、児童生徒同士、児童生徒と教師との議論の中で人間の真実やよりよく生きる意味について考えを深めることができるよう、それらが効果的になされるための授業全体の展開を構想する。

ウ 学習指導案作成上の創意工夫

学習指導案の作成に当たっては、児童生徒の実態、指導の内容や意図等に応じて工夫していくことが求められる。特に、重点的な指導や問題解決的な学習を促す指導、体験活動を生かす指導、複数時間にわたる指導、多様な教材の活用、校長や教頭などの参加、他の教師との協力的な指導、保護者や地域の人々の参加や協力などの工夫が求められることから、多様な学習指導案を創意工夫していくことが求められる。

学習指導案は、誰が見てもよく分かるように形式や記述を工夫するとともに、研修等を通じてよりよいものへと改善し、次回の指導に生かせるように学校として蓄積していくことも大切である。

(2) 道徳科の特質を生かした学習指導

道徳科の指導においては、生徒一人一人がねらいに含まれる道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、道徳的価値や人間としての生き方についての自覚を深めることで道徳性を養うという特質を十分考慮し、それに応じた学習指導過程や指導方法を工夫することが大切である。児童生徒自らが望ましい人間としての生き方を追求し、道徳的価値についての見方や感じ方、考え方を深めていく。そ

れとともに、児童生徒が自らのよさや成長を実感できるように工夫することが求められる。道徳科の学習指導過程には、特に決められた形式はないが、一般的には以下のように、導入、展開、終末の各段階を設定することが広く行われている。このような指導を基本とするが、学級の実態、指導の内容や教師の指導の意図、教材の効果的な活用などに合わせて弾力的に扱うなど各段階での多様な工夫をすることが大切である。

#### ア 導入の工夫

主題に対する生徒の興味や関心を高め、学習への意欲を喚起して、児童生徒一人一人のねらいの根底にある道徳的価値や人間としての生き方についての自覚に向けて動機付けを図る段階である。具体的には、本時の主題に関わる問題意識をもたせる導入、教材の内容に興味や関心をもたせる導入などが考えられる。

#### イ 展開の工夫

ねらいを達成するための中心となる段階であり、中心的な教材によって、児童生徒一人一人が、ねらいの根底にある道徳的価値の理解を基に自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、道徳的価値や人間として（自己）の生き方についての自覚を深める段階である。道徳的価値を生徒自らが自分のこととして捉え、道徳的価値を自分の生活の中に生かしていこうとする思いや課題が培われることが必要である。

具体的には、児童生徒の実態と教材の特質を押さえた発問などをしながら進めていく。そこでは、教材に描かれている道徳的価値に対する児童生徒一人一人の感じ方や考え方を生かし、児童生徒が自分との関わりで道徳的価値を理解したり、物事を多面的・多角的に考えたり、自分の問題として受け止め深く自己を見つめるなど学習が深まるように留意する。児童生徒がどのような問題意識をもち、どのようなことを中心にして人間としての生き方についての考えを深めていくのかについて主題が明瞭となった学習を心掛ける。

また、問題解決的な学習や体験的な学習を取り入れる場合には、児童生徒と教師、児童生徒相互の対話の深まり、議論の深まりが、児童生徒の見方や考え方の高まりを促すことから、課題に応じた活発な対話や議論が可能になるよう工夫することが求められる。

#### ウ 終末の工夫

ねらいの根底にある道徳的価値に対する思いや考えをまとめたり、道徳的価値を実現することのよさや難しさなどを確認して、今後の発展につなげたりする段階である。この段階では、学習を通して考えたことや新たに分かったことを確かめたり、学んだことを更に深く心にとどめたり、これからへの思いや課題について考えたりする学習活動などが考えられる。児童生徒一人一人が、自らの道徳的な成長や明日への課題などを実感でき確かめることができるような工夫が求められる。

#### 【参考・引用文献】

「小・中学校学習指導要領解説特別の教科 道徳」文部科学省、平成 29 年 7 月